

附属高校における歯科保健指導の取り組み － ICTを活用した学生による個別保健指導を通して－

浅田 知恵* 圓岡 和子**

*養護教育講座

**附属高等学校

Approach of the Dental Health Guidance at Affiliated High School － Through Individual Health Guidance using ICT by University Students －

Chie ASADA* Kazuko MARUOKA**

*Department of School Health Sciences, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Senior High School Affiliated to Aichi University of Education, Kariya 448-8545, Japan

Keywords：保健指導 タブレット 歯肉炎

I はじめに

学校における歯科保健活動は、子供の生涯にわたる健康づくりの基礎を育成するものである。高校生の口腔内の状態は、永久歯の萌出がほぼ終了し安定しているが、歯並び・口臭に関心をもつ一方、歯肉炎の発生などが生じやすいことから、自らの生活習慣等を見直し、改善する意識を高めたい時期である。

附属高校の令和4年度の歯科検診の結果を見ると、「未処置歯あり」が2.1%と全国平均15.05%よりも少ないが、歯肉炎や歯垢の付着は毎年約50%の生徒にみられ、日頃の歯磨きが正しくできていないことが口腔内の健康課題と思われる。

歯科検診は、生徒が自分の口腔内の状態に関心を高める機会でもあることから、検診前の待ち時間で、養護教諭志望の学生による歯科個別指導を計画した。その際、ICTを活用することで、生徒が自分の口腔内の状態を視覚的に捉えやすくなり、効果的な指導になると考えた。そこで、本研究では、学生が生徒に対してタブレット等を活用した個別の歯科保健指導を行うことによって、口腔内の健康に関する生徒の意識を高めることを目的とした。

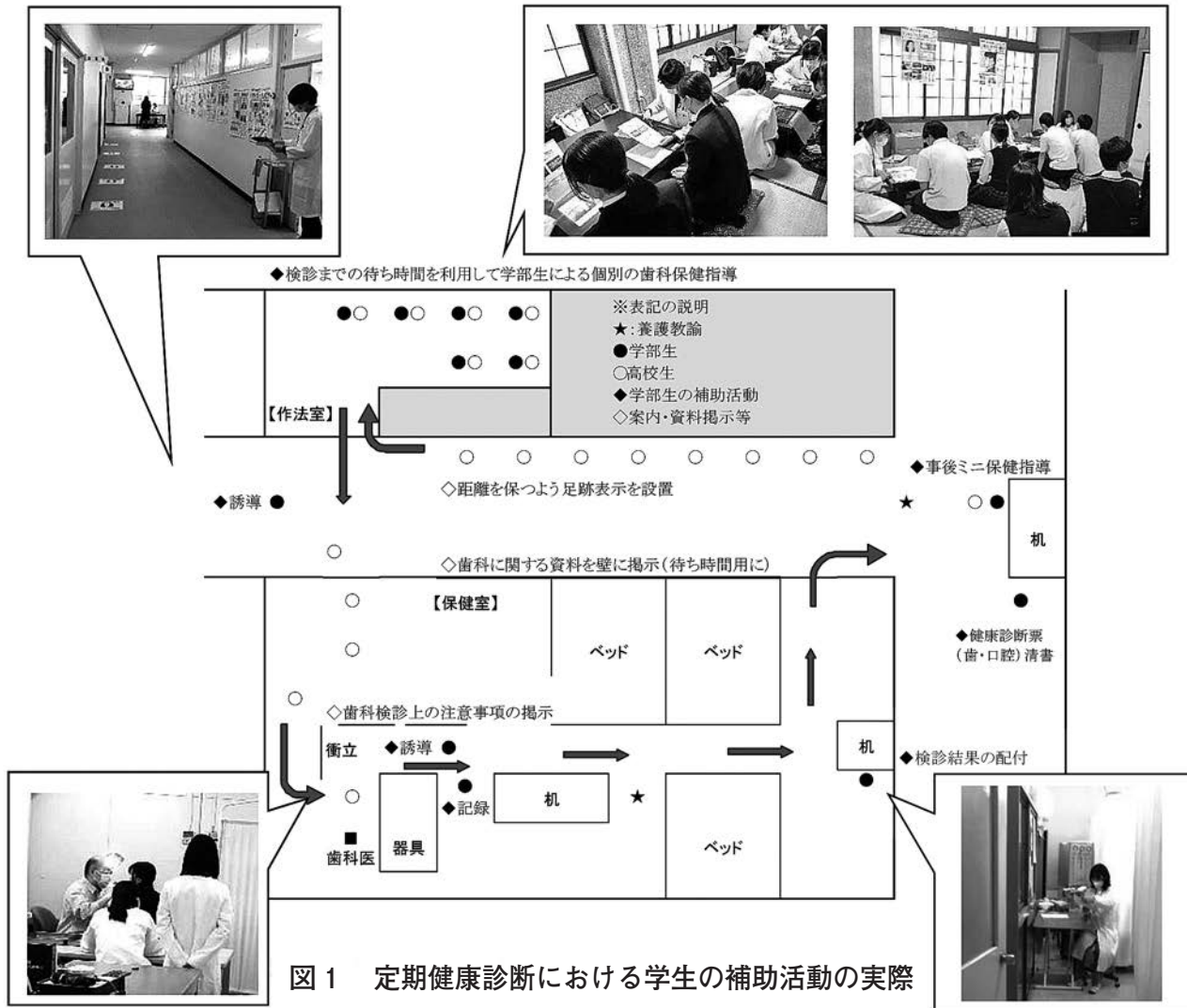
II 実践の方法

本実践は、令和5年4月～5月の歯科検診の待ち時間を活用して、附属高校の生徒355名を対象とし、養護教諭養成課程の学生34名が歯科検診補助活動と歯科保健指導を行った。取り組みの実際の流れを図1に示した。

歯科保健指導は、生徒一人に対して学生一人で個別に行った。鏡のようにタブレットを使用して、生徒が口腔内の状態を視覚的に捉えられるようにし、歯肉の状態を確認させ、歯肉のチェックポイントと歯磨きの方法を指導した。また、同意を得た生徒には、タブレットで口腔内の状態を撮影し、歯肉炎の写真資料と見比べて、自分の歯肉の状態を客観的に見ることができるようにした。

高校生には、歯科保健指導の前後でオンラインにてアンケートを実施した。説明文に「成績に関係しないこと、教育や研究以外の目的で使用しないこと、個人が特定される分析はしないこと」を記載し、回答の提出をもって同意を得たものとした。なお、有効回答者は事前294名（回収率82.8%）、事後176名（回収率49.6%）であった。

大学生には、附属高校での健康診断補助活動後の7月に、歯科保健指導を実践して「ICT



活用について」「指導できたこと・できなかったこと」「実践して気付いたこと」等についてMicrosoft Formsで自由記述による調査を行い、KHCoder (Ver 3. Beta. 04a:樋口2021)を用い分析した。なお、調査時に「実習での学びを知る資料であり、教育や研究以外の目的で使用しないこと、個人が特定される記載はしないこと、成績とは無関係であること」を口頭で伝え、回答の提出をもって同意を得たものとした。なお、有効回答者は20名(回収率58.8%)であった。

Ⅲ 結果及び考察

1 附属高校のアンケート結果

歯磨きの習慣を尋ねたところ、「朝出かける前」と「夜寝る前」に歯を磨く日が「週に6～7日」「ある」生徒は事前事後とも8割

以上であり(表1)、基本的な歯磨きが習慣になっている生徒が多かった。また、歯科保健指導後に歯みがきの仕方や習慣に良い変化がある生徒も多かった(表2)。特に、「歯肉の状態」に良い変化が「ある・少しある」59名(33.5%)のうち、「歯みがきの仕方や習慣」に良い変化が「ある・少しある」と答えた生徒が55名(93.2%)であったことは、習慣の変化が歯肉の状態に良い変化をもたらしたことを意味している。そして、「歯を磨く時に鏡で確認している日(以下、鏡で確認)」が「週に6～7日」「ある」生徒は、事前37.1%から事後44.9%と7.8%増加していた(表3)。さらに、事前事後ともにアンケートに回答した160名では、良い変化が「ある・少しある」102名は、事前26.5%から事後41.2%と14.7%増加しており、自分の口腔内の状態を確認し

表1 歯みがきの習慣（事前 n=294、事後 n=176）

		朝出かける前に歯を磨く	夜寝る前に歯を磨く	歯磨き時に歯茎から出血
事前	週に0～2日	15 (5.1)	8 (2.7)	265 (90.1)
	週に3～5日	40 (13.6)	24 (8.2)	21 (7.1)
	週に6～7日	239 (81.3)	261 (88.8)	8 (2.7)
事後	週に0～2日	9 (5.1)	3 (1.7)	156 (88.6)
	週に3～5日	19 (10.8)	15 (8.6)	9 (5.1)
	週に6～7日	146 (83.0)	158 (89.8)	5 (2.8)

表2 保健指導の効果（n=176）

【良い変化】	歯肉の状態	歯磨きの仕方や習慣
ある	8 (4.5)	37 (21.0)
少しある	51 (29.0)	74 (42.0)
あまりない	31 (17.6)	28 (15.9)
変化なし	75 (42.6)	35 (19.9)
わからない	10 (5.7)	1 (0.6)

表3 歯をみがく時に鏡で確認している日と保健指導後の変化の有無

	事前 (n=294)	事後 (n=176)	事後に変化がある・少しある (n=102)		事後に変化がない・あまりない (n=58)	
			事前	事後	事前	事後
週に0～2日	87 (29.6)	46 (26.1)	30 (29.4)	23 (22.5)	19 (32.8)	20 (34.5)
週に3～5日	98 (33.3)	50 (28.4)	45 (44.1)	37 (36.3)	18 (31.0)	9 (15.5)
週に6～7日	109 (37.1)	79 (44.9)	27 (26.5)	42 (41.2)	21 (36.2)	28 (48.3)

ながら丁寧に歯磨きする習慣がついた様子が伺えることから、保健指導の効果があったと考えられる。

「口腔内をタブレットで撮影した」118名（67.0%）のうち、「参考になった・まあまあ参考になった」91名（77.1%）、「参考にならなかった・あまり参考にならなかった」27名（22.9%）であった。

「歯磨き指導を受けてよかったこと、役に立ったこと」を自由記述で尋ねたところ「歯の磨き方を教えてもらって実際にやってみたら前より簡単に綺麗に磨けるようになった」「歯ブラシの使い方で間違えていたところがあったよりもあった。気づけてよかった」「歯磨きをする時に言われたことが頭をよぎるので、なんとなく意識するようになった」「自分の歯の状態がわかった、磨き方も再度確認できてよかった」など、多くの生徒が正しい歯磨きの仕方について学べたことを述べていた。また、「自分の写真といい状態の写真の比較がしやすかった」「自分の歯がどんな感じになっているのかしっかり見る機会はほとんどないので、良かったと思う」など、タブレットを使用した効果を感じている意見も見られた。一方で、「タブレットで歯の様子を撮影する必要性をあまり感じられなかった」

という意見もあり、タブレットを使用したより良い指導方法については今後の課題である。

2 学生の振り返り

本実践に参加した学生のアンケートのうち、歯科保健指導を実践して「ICT活用について」「指導できたこと・できなかったこと」「実践して気付いたこと」の記述内容について、テキストマイニングの対応分析を行った（図2）。対応分析の結果は、原点（0・0）近くに布置されている語は特定の項目との対応がない語と判断できる。一方、原点（0・0）から離れている語ほど各項目を特徴づける語であると解釈できる。図2で「ICT活用」に特徴的な語として、「タブレット」「撮る」「見る」「使う」が布置しており、具体的な記述に「鏡では見る方向で見えるものが変わるので、今回タブレット端末を使用できてとてもよかった」「写真を撮ることで自分ごととして考え、興味をもって話を聞いてもらえと感じた」「写真を撮るなら生徒自身のタブレットを使った方がよい」「画質が悪く、写真に撮ると歯肉の色や形がはっきりとわからなかった」など、タブレットのよさと課題の両面を読み取ることができた。「指導できたこと」の特徴語には、「歯磨き」「正しい」「見せる」「歯肉」等が布置しており、具体的に

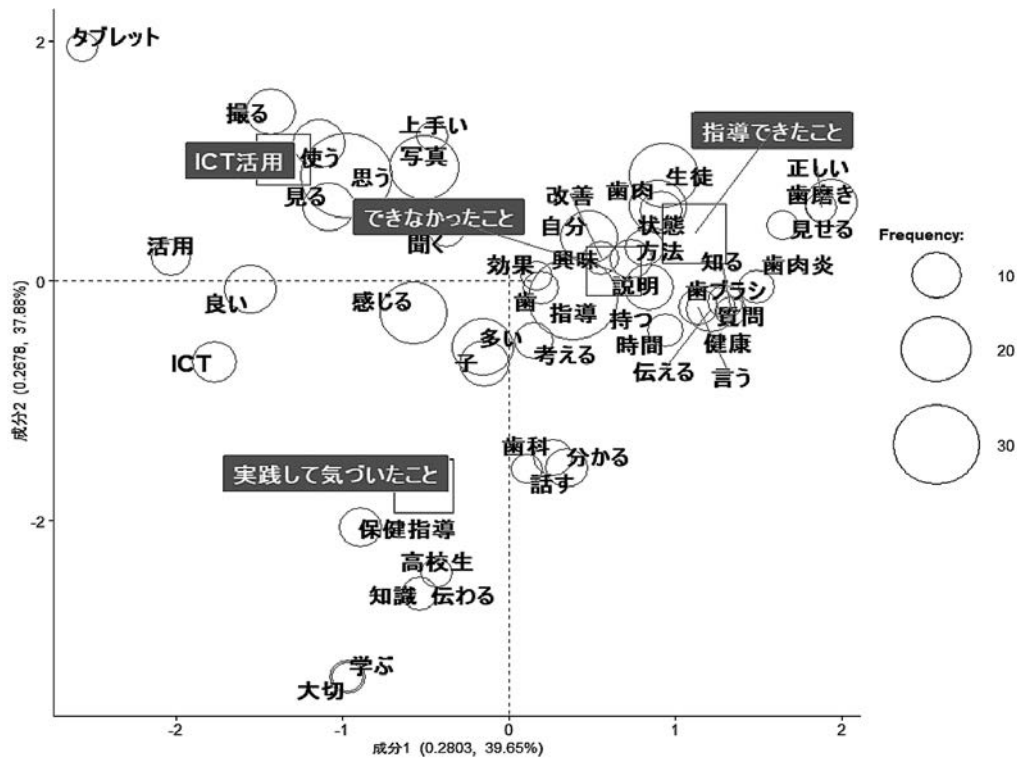


図2 「ICT活用」「指導できたこと」「できなかったこと」「実践して気づいたこと」の対応分析

は「歯肉炎や正しい歯磨きの仕方などを説明した時に『なるほど』『知らなかった』などと反応してくれた」「歯肉の状態について、健康なものと歯肉炎の写真を見比べながら『どこが違うかな?』と問いかけた」など生徒と対話をしながら保健指導に取り組んだ様子が伺えた。「指導できなかったこと」の特徴語は「指導できたこと」と重なる語も多いが、「歯ブラシ」「説明」「質問」「歯肉炎」等が布置しており、「根拠を説明することでより歯磨きをしようという気持ちになってもらえたのではないかと」「写真を撮って指導することが難しかった」などの記述から、歯科保健指導に取り組む学生に対する事前の指導をより充実していく必要があると思われた。また、「実践して気づいたこと」の特徴語には、「知識」「大切」「学ぶ」「伝わる」「保健指導」が布置しており、「ICTの利用をより効率的に使える知識が必要だと思った」「一人一人に個別に保健指導をすることで、全体を対象とするよりもそれぞれに適した指導ができるというよさを実感した」「視覚的にわかりや

すく説明することの大切さを学んだ」「普段の生活を聞いて保健指導をしたので、その子の口腔衛生に対する考え方がわかった」などの記述から、個別の保健指導の実践を通して、根拠や生活習慣に着目するなど、より効果的な指導の在り方を模索していると考えられた。

3 本実践を通して

高校生への歯科指導について、圓岡らは自らの口腔内や生活習慣の問題点を考え対応させることを中心に指導することで、生涯を通して歯や口腔を含めて自らの健康づくりを継続する姿勢を育成できると述べており、森下らも、高校生は歯は正しく認識しているが歯肉炎についての認識が低いことを指摘し、歯周疾患予防対策の重要なターゲットと述べている。本実践では、学生による個別の歯科保健指導を通して、附属高校の生徒の口腔内の健康、とりわけ生徒自身の歯肉に着目したことによって、歯肉炎を予防するための歯磨きについての意識を高めることができたと考ええる。また、タブレットの活用は視覚的に理解しやすく、指導を行う上で効果があること

が分かった。今後は、学生がタブレット等のICTを上手く活用する方法を身に付けるなど、より効果的に指導する力を育てていきたい。

IV まとめ

附属高校における歯科保健指導を通して、生徒においては口腔内の健康に対する意識を高め、学生は既修の知識を生かした実践で学びを深め、意義のある取り組みとなった。今後も、今回の課題を改善し、より意義のある活動とするよう継続して取り組んでいきたい。

<参考文献>

圓岡和子他：高校生の口腔内状況と生活習慣との関係、東海学校保健研究38(1)：35－44、2014

森下真行他：高等学校における学校歯科保健活動に関する研究 第2報 歯科保健指導が健診結果の認識と受療行動に与える影響、口腔衛生会誌 51：145－149、2001